

事業成果報告書

1. 個人または団体名(団体名の場合は代表者名も記入)	
えすけん	(代表者名: すぎむら なおみ)
2. 研究または活動のテーマ(課題名)	
セクシュアル・マイノリティへのききとり調査 - 当事者と思春期のこどもをつなぐために	
3. 助成額	
390,000	円
4. 実施期間	
2012 年 7 月 ~ 2013 年 7 月	
5. 実施状況	
<p>2012 年 7 月 24 日 第 1 回会議 インタビュー方針について検討</p> <p>2012 年 7 月 28 日 インタビューーさがしのため、「カミングアウト」を考える集まりに参加</p> <p>2012 年 9 月 9 日 第 2 回会議 インタビューーの選出、その他</p> <p>2012 年 9 月 17 日 第 1 回インタビュー : 同性愛当事者</p> <p>2012 年 9 月 29 日 第 3 回会議 インタビュー内容と記述方法について検討</p> <p>2012 年 10 月 1 日 インタビューーさがしのため「発達障害とクィアを語る会」に参加</p> <p>2012 年 10 月 13 日 第 2・3 回インタビュー : 同性愛当事者、性暴力サバイバー</p> <p>2012 年 10 月 20 日 第 4 回会議 インタビュー報告、その他</p> <p>2012 年 10 月 27 日 レインボーパレード参加、インタビューー募集</p> <p>2012 年 11 月 10 日 第 5 回会議 パレード参加感想のまとめ、その他</p> <p>2012 年 11 月 17 日 第 4 回インタビュー : 同性愛当事者</p> <p>2012 年 11 月 30 日 第 5 回インタビュー : ドラグクィーン</p> <p>2012 年 12 月 2 日 第 6 回会議 インタビュー方針の再検討、その他</p> <p>2012 年 12 月 9 日 トランスジェンダー当事者の講演会に参加</p> <p>2012 年 12 月 16 日 第 1 回レクチャー : トランスジェンダー</p> <p>2012 年 12 月 18 日 第 6 回インタビュー : DV 被害者</p> <p>2012 年 12 月 27 日 第 7 回インタビュー : 不妊治療経験者</p> <p>2012 年 12 月 29・30 日 第 8~13 回インタビュー: セックスワーカー、トランスジェンダーなど</p> <p>2013 年 1 月 20 日 第 14 回インタビュー : セクハラ被害者</p> <p>2013 年 2 月 2 日 第 15・16 回インタビュー : セックスワーカー、同性愛当事者</p> <p>2013 年 2 月 11 日 第 2 回レクチャー : 性分化疾患</p> <p>2013 年 3 月 2 日 第 7 回会議 インタビューとレクチャーの扱いについて、その他</p> <p>2013 年 3 月 16 日 第 17・18 回インタビュー : 同性愛当事者</p> <p>2013 年 3 月 20 日 第 3 回レクチャー : 性暴力サバイバー自助グループ運営</p> <p>2013 年 4 月 21 日 第 4 回レクチャー : 性暴力への支援</p> <p>2013 年 5 月 11 日 インタビューーさがしのため、「マイノリティ民族とクィアを考える会」に参加</p> <p>2013 年 5 月 19 日 第 19 回インタビュー : トランスジェンダー</p> <p>2013 年 6 月 2 日 第 5 回レクチャー : セクシュアル・マイノリティのイベントの作り方</p>	

2013年7月7日 第6回レクチャー：クィア映画祭の作り方

2013年7月24日 第19回インタビュー：HIV感染者

6. 事業成果と自己評価

<事業概要>

「えすけん」は、「セクシュアル・マイノリティもマジョリティも、日本語が苦手な人も、みんなでかこめる性の本」(生活書院から『話そうよ！ 恋とエッチ』(仮題)として来春出版予定)を作成している。本事業はこの本の第2部に該当する。第1部では、「性感染症」「恋愛」「トランスジェンダー」「性暴力」など、「性」をとりまくさまざまな現象について図解とコラムで解説する。第2部においては、性に関する事柄で「マイノリティ」とみなされうる当事者の「自分語り」を紹介する。読者が多様性を実感することで、自らのあり方を肯定し、他者の「異質性」への肯定へと繋げていってこれればとの思いから設定した。

語り手は、知人の紹介、各種ホームページへのアクセス、各種イベントへの参加などをとおして探した。結果的に、19名にききとりを行い、また6回(9名)の講義をうけた。語り手には、「自分語り」を要求した。読者が個別具体的なさまざまな生き方を知ることで、自らのもつ「ステレオタイプ」なイメージをくずし、その多様性を感じ、自らのあり方を肯定する契機としてほしいと考えたためである。しかし、聞き取り依頼時に、「自分の経験が、同じ特徴をもつ人すべてに共通しているとうけとめられるのがこわい」、「自分の経験がひとつの名まえのもとにおしまれるのがいや」といった「表象」に関する問題を指摘する語り手が散見されたことから、「自分の体験を基軸とした活動」についても聞き取ることにした。語り手のなかには「自分の先行きが不安」「これからどう生きていけばいいのか」といった「マイノリティの生活モデル」がみえにくいことに不安を感じているものもあり、こうした活動紹介が今後の方向性を決めていく一助となることを願っている。これが、6回の講義の部分に該当している。

<自己評価>

語りを依頼する際、二つの点に留意していた。一つは、「セクマイ」だけではなく、中絶経験者や性感染症罹患者など、場面によっては「性に関してスティグマをはられる可能性のある人」すべてに対して、可能な限り聞き取りを行うこと。二つは、マイノリティ要素を複合してもっている人(たとえば、「同性愛」と「摂食障害」になやむ人等)に聞き取りを行うことである。双方がそろふことで、私たちが「ふつう」と信じていることでうんでいる差別的な態度や、「支援のはざま」におちこんでしまう人をだしてしまふ社会制度の不備などを明確にしていきたいと考えたからである。

一つめについては、語り手の大半が「セクマイ」を自認している人になってしまった。初期の語り手が積極的に知人を紹介してくれたため、「さまざまな人」にコンタクトをとる時間的・精神的余裕を失ってしまったためである。しかし「セクマイ」の人たちが語る場所を強く求めていることは把握できた。動機は、自分の経験を語ることで自認している「状態」について関心をもってほしいという「社会運動」的なケースと、「自分の経験を整理する」ために聞き手を求めているケースに分かれた。後者の場合、「活字となっているのを見て、自分自身がまだ自分の経験をうけとめきれない」とわかった。「読者の評価がこわくなってきた」などの理由で、原稿化を断られるケースもみられた。

二つめについては、予期せず可能となった。聞き取りを承諾するときは、自認している「状態」(たとえば、「ゲイです」「トランスです」など)で名乗りをあげた語り手が、聞き取りの中で性暴力の被害経験や、精神疾患をあわせもっていることなど、「複合的な状況」に生きていることを語ってくれたためである。しかし、ある「状態」への「差別」には敏感であっても、他のスティグマをはられるような「状態」には差別的態度をとっている語り手もいた。それは彼らなりのサバイバル戦略であるようであった。あたかも「たしかに『マイノリティ』の部分もあるが、それ以外は『常識』的な人間だ」とアピールすることで、自らが肯定し受容している「マイノリティ」部分が、社会的に肯定し受容してもらいやすくなると考えているようであった。こうした態度は、ある個人が自認する「状態」と「一般概念」の間の乖離もうんでいた。

これは、語り手個人だけの問題ではない。そもそも無関心、あるいは「一般概念」とおしたイメージのみである「状態」を理解したつもりになってしまう人々がうんだ状況でもある。そして、これはある「状態」への「理解者」「支援者」をも含んでいる。「支援者」の側にとって、想定外の要素がある、支援の不適切さを指摘されるなどの理由で支援をうちきるといふ状況も語られた。

今回の聞き取りによって、「えすけん」メンバーは自らの「マジョリティ」の部分を変えて認識するとともに、「支援する」ということの意味を根本的に考えることができた。詳細は、ぜひ生活書院から出版される『話そうよ、恋とエッチ』(仮題)で確認してほしい。